

研修会参加者から

図書館でボランティア活動をしている立場から、司書教諭の立場から、学校司書の立場から、ご意見を寄せていただきました。

ボランティアグループ
「宇佐なかよしキャラバン」の池田紀子さんから

伝える力を育てたい

研修1で感じたこと

まず大人が変わらなければ

「実践してこそ、子どもを知ることができる」という田島さんの言葉が心に残っています。私も保育園や小学校で子どもたちと接する中で、子どもの豊かな感性に触れたり、大人の感覚では計ることのできないことを発見したりすることが多いので、田島さんの話に共感しながら聞きました。読みきかせの実践については、今までやってきたこと、学んできたことを裏付けてくださるものでしたので、これからも精進していこうと、気を引き締めました。

子どもの読書活動の推進について、子どものことを問題にする前に、まず大人はどうなのか、大人の読書活動をもっと活発に行うべきだと思っています。子どもの読書活動を活発にしていくためには、大人の適切な働きかけや助言が必要です。まず大人の豊かな経験があってこそ、子どもに豊かな経験をさせることができます。

子どもの読書活動を推進していくために、県立図書館の読みきかせボランティアやPTAなどへのサービス、おすすめの本のリスト、市町村図書館への支援サービスなど、有効な支援をお願いします。そのことを宣伝し、活用していきたいと思いました。グループとして県立図書館に出向いて話を聞いたり、検索などもしてみたいと思っています。

研修2から学んだこと

多彩な実践で子どもを育てる

とてもエネルギーでユニークな実践をされている山月館長さんに魅了されました。「うちの図書

館は騒がしいですが、私はそれでいいと思っています」と胸を張っておっしゃっていたのがとても素敵でした。

自分の仕事に誇りを持ち、情熱を燃やして前向きに取り組んでいるところに感心しました。挟間という地域性や特色を生かした独自の活動は、他の図書館も学ぶことが多いのではないかと思います。挟間がやっているような地域に根ざした生きた活動に学び、それぞれの市町村で工夫して実行していけば、地域の読書活動を推進することができるはずだと思います。

挟間町立図書館の子どもサービスから多くのことを学びました。積極的な学校図書館との連携。子どもが簡単に親しみやすく図書館の本を検索できるソフトの開発。見事です。夏休み中のジュニアボランティアの受け入れ。おはなしキャラバンの出前。読み聞かせグループの学習会。ブックスタート。これらの活動から数え切れないほどのことを学び、もっと聞きたいこともたくさんありました。私たちにできることはすぐに取り組んでいきたいものです。

挟間では図書館を核に子どもたちに接し、子どもと向き合っています。大人たちの真剣さ優しさを子どもたちはちゃんと知っています。このような大人の姿を見せる町では、子どもの読書活動はきっと着実に推進されているに違いありません。

(研修3と4についても同じ字数で書いていただいています、略します)

学んだことを生かして活動を

子どもを取り巻く身近な大人が、子どもの読書意欲を培うものだ、私はいつも思っています。もちろん、小さい頃から本の好きな子どももいるし、嫌いな子どももいますが、環境によって子どもは大きく変わっていくというのも事実です。我が子は本を読んでいませんでしたが、私が読みきかせのために、数多くの本を読み、常に本が身近にたくさんあるという環境になってしばらくすると、自然に本を読め

る、本を読みたいと、子どもに変化が起きていました。多分、おもしろそうだから読み始めたのでしょう。

おもしろいから、興味があるから、本を読んでみたいという欲求を子どもに起こさせることが、読書推進の第一歩だと思います。本をいかに読ませるのではなく、どう興味を引き出すかということが重要だと考えています。

読みかきの活動の中で、とくに私が気をつけていることは、子どもたちになるべくたくさんのジャンルの本に出会わせてあげること、なるべく違った人の読みかきを聞く機会を設けてあげることです。多様な経験をしてもらい、豊かな心の成長を願って活動をしています。その中で大好きな一冊に出会って、それが今後の読書につながってってくれるように願いながら。

今日の研修会で紹介された、県立や市町村の図書館、学校図書館のさまざまな取り組みを聞いただけで終わらず、学んだことを生かして、これからもアンテナをのばし続けて、社会への働きかけにも無関心であってはならないのだと、再確認しました。今日学んだことを自らのものにしておくのではなく、周りにどうやって伝えていくかが課題です。伝えていくことは本当に難しいことですが、もっと学び視野を広げ、自分を磨き、経験を積んでいくことによって、伝える力も育つのだと思っています。

この研修会を企画していただいたことに感謝しています。

匿名希望小学校司書教諭から

先生方よ、このままではいけない

ボランティア活動をしている人から、図書館や公民館の職員、幼稚園、保育園、小中高の保育士や先生まで幅広い層の参加者が集まった研修会をどのように運営するのか、興味を持って参加しました。子どもの読書活動はいつまでたっても振興を見ないし、公共図書館は20館足らず、学校図書館も貧弱で一向に進まない、といった寒々しい状況を何とかしなければならぬと研修会に踏み切った別府大学に敬意を抱きながら、約20年ぶりにやってきました。思い切って、日ごろの鬱憤、本日の感想を述べます。

県中央部の公立小学校の司書教諭ですが、いろいろ考えて匿名にします。

県が出した「推進計画」を読もう

大分県教育委員会が出した「子ども夢ライブラリー計画」について、挟間図書館の山月館長は「内容がどうのということより、出たことの意味が大きい。あの計画を生かしていくかどうかはわれわれにかかっている」と述べていましたが、その「計画」は本当に子どもの読書の実体を知り、何から手を付けていったらよいかを分かっている人たちが、議論を交わして作成したものなのですか。山月さんも推進委員の一人のようですが。

「長」という肩書きの人は名を連ねているものの、司書教諭も学校司書も公共図書館の児童担当司書もNPOや読書ボランティアの人も、今何をしています、何に困っていて、何をどうして欲しいと望んでいるかを、少しは考えて「計画」を立てたのですか。現場の意見をどのくらい参考にしているのか、という視点で読み直していただければ、「計画」が絵に描いた餅であることが分かるはずですが、そして、もっと恐るべきことは120名の参加者のうち、あの「計画」を10名も読んでいないのではないかと、私はそう思っています。まずぜひ読んで欲しいです。

学校図書館の必要感がない

私の学校は、司書教諭1人。学校司書0人。図書館担当者は低中高代表3人。ボランティア活動の応援はあります。教育改革だ、自ら学ぶだ、総合学習だ、調べ学習だ、といった声は出ています。職員会議で「教育のあり方や教育目標」としては議論を盛んにしていますし、他校の実践に学んだりしていますが、学校図書館が必要不可欠のいわゆる学習情報センターになるなんて、まだそのケもありません。学校図書館を必要とする教育実践がほとんどやられていないのです。それ以前の資料センターでも読書センターでもなく、児童に本をすすめたり、相談に乗ってあげたりする「人」もいないまま、それをおかしいと思う教師も父母もほとんどいないままになっています。

「こんな学校図書館にだれがした」と問い詰められれば、「それは先生だ」と詫げるしかありません。授業をしているわれわれは、まだ（今のところ）学

校図書館がなくても（ちゃんと？）やっていきますから、校長からも父母からお叱りを受けることはありません。兼務で忙しい司書教諭が、立場上学校図書館の利用や希望図書や図書館行事について提案すると、大きな反対はないものの、司書教諭が配置された後に「こう変わった」ということはまだありません。だって、私は一人でいくつもの責任を果たせませんもの。

専門職員として働きたい

司書教諭は「当分の間」がとれて、12学級以上に配置はされたものの、法律上の措置で配置されただけの学校がほとんどということをおぼろげに情報交換しながら知っています。司書教諭らしい仕事はやっていません。本当に司書教諭が専門職員として発令の名に恥じない仕事ができるようにして欲しい、私たちは司書教諭としての使命感を持っていますから。司書教諭は「当分の間」がなくなったというけれど、11学級以下の学校はどうなるの？一人もいない学校が圧倒的に多い学校司書の配置はどうなるの？これらの大きな問題を放置しておいてよいはずがありません。

研修4で大分県SLAの伊藤事務局長が苦渋に満ちた顔で、学校図書館の現状を話していました。あの実態調査の表が、私は大分県学校図書館の実態を見事に示していると思っています。

「図書館に人を、本を」の声を

しかし、先生も父母も地域の人も「整備費はどうなっているのか、学校図書館に学校司書を置いて欲しい。学校図書館にもっと新しい本を」などと、行政に要望する行為は起こさない。それは（おかげさかも知れませんが）先生方が、学校図書館の必要性も貧弱さも、「人」がいない図書館は図書館でないということも、我が事と感じていないからです。

以上、愚痴ばかり申し上げましたが、この研修会を機会に、各地の子どもの読書活動に携わっている人たちが集まり、学びあい、知恵を出し合って、必ずや近い将来「以前はあんなことがあったなあ」と言えるようになりたいものです。そのきっかけを作って下さった別府大学にお礼を申し上げます。来年も来ます。

匿名希望中学校学校司書から

研修会に参加して思ったこと

今年度このような研修会を企画運営していただいた別府大学の関係者のみなさんに感謝したいと思います。今まで学校図書館関係の研修会ばかり参加していた者にとって、この研修会は非常に刺激的で魅力に富んだものでした。

最初の県立図書館司書の田島さんの話は具体的で、絵本の読み聞かせの仕方や絵本の選び方など、すぐに役立つ実践を具体的に教えていただき、明日からの図書館サービスに直結する研修となりました。

次に図書館の児童サービスについてお話いただいた挾間町立図書館長の山月さんの熱意あるお話には心を強く打たれました。日頃からの熱心な仕事が、あのような素晴らしい図書館とサービス活動を生んだのだと思います。また、学校図書館との連携においても熱心に取り組まれており、公共図書館のない地区にある学校図書館に勤務する司書にとっては本当にうらやましく思いました。

午後からの横浜市立大学の朝比奈教授の話は理論的で、読むとはどういうことか、図書館とは何かを私たちに指し示してくれたものと思います。特に「図書館は良書、悪書の区別をしない」「図書館は利用者へのサービス機関である」「図書館は楽しいところ、役に立つところである」等、改めて図書館の意味を考えさせてくれました。また、最近の悪書追放運動についても、その危険性を指摘されていました。

県下の学校図書館は危機的状況

最後の県SLA事務局長の伊藤先生の話は、大分県の学校図書館のおかれている厳しい現状を、ある意味そのまま語っていたのですが、この話を聞いただけでは、参加者の一層の失望に繋がっていくのではないかと思います。今の危機的な状況をどのように乗り越えていこうとしているのかを話していただけたら、また、違った研修会になったのではないかと思います。私ひとりだけでしょうか。

子どもの読書に関心を寄せる人々を対象にして、幅広く研修の機会を与えてくださった関係者のみなさんに改めてお礼を申し上げます。来年以降もこのような研修の機会を提供していただきたいと心から願っています。